

<川越市>



失笑を買う

フェイスブック「川越市長 川合よしあき」(12月20日付)に見えた

“市長に抱かれる”明ヶ戸亮太市議の厚顔無恥

先般(12月18日)、本紙から川越市議会の議員各位に、明ヶ戸市議が一市民に伝えた「[川合善明市長買春の真偽](#)」を御調査願う一件を御送達いたしました。

その文末には「この一件は、一般市民が軽々に処置できる問題ではありません。

従って、本紙でも現時点ではこの問題を取り上げるつもりはありません。」と結び、人格・見識ともに市民の優れた代表者であられる川越市議会議員各位による徹した御調査を賜りたい旨御願ひ申し上げました。

しかし、その2日後の12月20日、川合善明市長のSNS活動であるフェイスブック「川越市長 川合よしあき」において、驚くべきことに川合市長自身が懸案の「買春疑惑」を取り上げるという事態に至り、本紙は別の観点から改めて本件の調査を市議会議員各位に上申させていただくことと致します。本文は、前半で現時点での本紙社主・松本から本件についての趣旨を改めて述べた上で、後半では本件について多様な角度からの分析を試みたものです。僭越ながら市議各位には本紙の見解をご参考頂き、本件の対策と解決に向けたご尽力を賜りたく存じ上げます。

— 趣 旨 —

明ヶ戸市議は、市民を前に吐いた事実を隠す意図を以て、あたふたと川合市長の部屋へと前後の見境なく駆け込んだ。明ヶ戸市議が川合市長の「買春疑惑」を市民に告白し

たことは、この明ヶ戸市議の見せた行動によって、いよいよ真実性を増したものと言わざるを得ない。なぜなら、明ヶ戸市議が市民にその噂を吐露したのでなければ、最初に駆け込むべきは本紙事務所であったはずだからだ。自分が言ってもいないことを本紙に書かれて、市議各位に頒布されたのであれば、市議の信頼と名誉を毀損する本紙に抗議することが常識である。いや、明ヶ戸市議をしてさえ選良として有権者の代表のひとりとなったのだから、汚名を注がれればその潔白を公に証明することは常識というよりも支援者に対する市議の義務である。しかし、現在に至るまで明ヶ戸市議から本紙に対する抗議や情報修正の要請は届いていない。その代わりに、明ヶ戸市議は会派に相談することもなく、真っ先に市長室に駆け込んだのである。

ここに明ヶ戸市議は、市民を裏切った反省の欠片もない最低な男の見苦しい姿を市議諸氏の前に晒したことになる。一方の川合市長は、自分に“抱かれに来た”明ヶ戸市議を、あたかもそれが大きな器の人間性であるかのように「くるしゅうないぞ」とばかりに受け入れ、逆に明ヶ戸市議の釈明を本紙攻撃の具材に転用したのである。

本来であれば川合市長は、明ヶ戸市議の個人プレーを拒絶して、まず会派の長を通じて市議会議長を経て執行部たる自分に、釈明なり主張を伝えるべきだと教示するべきであった。そうでなければ市議会の存在理由がない。そもそも市の執行部を監視する立場の市議が、会派も議会も無視して市長に直訴するなど、それだけで市議の資格がないと言うべきだろう。

明ヶ戸市議と川合市長の姿勢は、他の市議の存在を無視する行為である。

過日本紙が市議各位に送付した文書の通り、本紙が得た情報は明ヶ戸市議が市民男性に対して「市議の斡旋によって川合市長が未成年子女の買春をした」という疑惑の吐露であり、明ヶ戸市議自身が、どこの誰に買春の件を聞いたかは不明である。だが、本紙に情報を寄せた市民が明ヶ戸市議の知人というからには、明ヶ戸氏にも心当たりがあるはずだ。明ヶ戸市議が「全くの嘘、自分は知らぬ」というのであれば、その市民男性と本紙にまず「なぜこのような嘘を吹聴するのか」と厳しく追及することが先であり、川合市長に泣きつくような問題ではない。

後段に論考するが、川合善明市長は自治体行政の長としての立場にありながら謙虚さを欠き、自分が市民の反感を買う行為をしても己は正しいと言い放つ身勝手な人物で、議会においてその事を指摘されても訂正も謝罪もしない人物だ。ところが自分に媚へつらう者は無条件で受け入れる。

今回、公開されたフェイスブックでも、自分に泣きつく明ヶ戸市議を労わり“明ヶ戸議員さん”などと呼んでいる。それよりも、川合市長の異常さは自分に向けられた「買春疑惑」を嬉々としてフェイスブックで公表することである。

川合市長としては「全くの事実無根の怪情報だからこそ、堂々と公開した」と主張しているつもりだろうが、社会はそうは思わない。真偽が定かでない以上、「市長による未成年子女買春疑惑」が存在するということだけで川越市の名誉を著しく汚すことだということを川合氏は全く理解できていないのである。それが「市議の斡旋」であったというオマケまでつけばなおのこと、噂の段階でも市政を揺さぶる重大事だ。

しかし、川合市長は明ヶ戸市議が泣きつきに来た直後には、これが本紙の情報工作でありその証拠をつかんだような高揚感でもあったのか、前後の見境もなく世界中が閲覧できるフェイスブックで公表したのである。

このような川合市長の想像もつかない突飛で異常な言動についての論考は後段に譲るが、いずれにしても、川合市長には市民35万人の自治体の長を預かっているという自覚は微塵もないことが明らかとなったのである。また明ヶ戸市議も議員たる資格は皆無だ。市長室に駆け込む前に会派に相談すべきであったと前述したが、それ以前の常識として、そもそも「一般市民」に広めるとは市議の資格云々の埒外の「ただの能天気」でしかあるまい。「市長の買春疑惑」などという情報は、これが真実であっても虚偽であっても機密情報に等しいほど重要なものだ。

市政の中枢にいる議員が軽々に市民社会に拡散させてどうするのだ。それに輪をかけて川合市長は、明ヶ戸市議を諷めるところか喜んでいるのだから開いた口が塞がらない。本紙などは、従前から川合市長の言動に口を閉じる間もないほどであるが、さすがに本件については敵ながら情けなさしか感じ得ない。本紙が過日市議各位に送付した文書は、いわば川合市長に対する惻隠の情でもあった。当方もまた川越市民であり、真偽を問う以前の問題として、現役市長が未成年子女買春（それも市議の斡旋による）などという情報を、なんの裏付けもなく報道するわけがない。

本紙に本件情報をもたらした市民は「明ヶ戸市議は、私共の信じる人である」と語っていた。市民からすれば、信頼を寄せる明ヶ戸市議が、市長・市議の大義を忘却した天をも欺く許し難い悪質な買春行為を実行したとの疑惑に対して何故に沈黙しているのかと煩悶した。心ある市民は、明ヶ戸市議の話聞き捨てには出来なかった。

明ヶ戸市議の話が事実であるとすれば、川越市に居住している市民は腐りきった性犯罪者を市長に戴く誇りなき衆愚として、やがては全国民から嘲りの的になるであろうと思うと無性に腹が立ち悩み逡巡した。

市民は、信頼すべき明ヶ戸市議が必ずや、この真偽を明らかにすることを信じて待ったが、その問題は放置されたままであった。こうして市民は明ヶ戸亮太市議に見切りをつけ、意を決し本紙を訪れたのである。

市民に苦悩を与え、それを放置した明ヶ戸市議は、真偽を問うべき川合市長の懐に顔を埋め、「**全くの嘘。市長に関するこんな話…自分は全く知らない**」と泣きを入れ、市長は明ヶ戸市議を己の味方であると明ヶ戸市議の肩を抱いたのだ。市民の思いは、哀しく的中したようだ。今の川越市の上層部は、こんな体たらくの渦中にあるのだと…。

いずれにせよ、川合市長が今になって「**買春疑惑**」の情報を自身のフェイスブックで取り上げて社会に（また世界に）公表したからには、市議会議員各位に御調査を願うと同時に、捜査機関の手も借り「**川合善明市長の買春行為と、それに介在した市議の疑惑**」を全ての人々が知り、その真偽が解明されることを望んで当然である。心ある市民を欺き、自己保身のためには会派も議会も放り投げて川合市長に抱かれた明ヶ戸亮太市議は、ただちに川越市議会より去ることを強く望むことも市民の当然の想いとなる。

川越市議会議員各位におかれましては、この一件に関して各位のお力を以て徹した御調査を賜わりますよう御願い致して居りましたが、当該一件は川合市長自らを以て公表されたことで、本紙は些か有しておりました惻隠の情を捨て、改めて川合市長と市議が介在したとする買春疑惑の真偽解明への道を、市議会議員各位のお力を借り歩みたく存じます。暫時お心わずらせましたる段、御許し賜わりますよう合わせてお体にお気を配られ、良いお年をお迎え下さいますよう祈念申し上げ失礼致します。

令和元年 12月 23日

行政調査新聞社

社主

松 本 州 弘

12月24日川越市議会議員各位に配布した文書

— 論 考 —

本文では前半本紙主旨に加えて、本件問題を別の角度から論考するものである。前半記述に重複するところもあるが、ご参考までに一読いただきたい。

【前代未聞の公私混同SNS】

川越市長川合よしあきフェイスブック(2019年12月20日付)を分析する

世界最大規模のSNSツール「Facebook(以下、フェイスブック)」に「川越市長 川合よしあき」というアカウントがある。フェイスブックのアカウント解説と公開に費用は生じないため、この市長のフェイスブックに川越市の予算が支出されているわけではな

い。その一方で自ら「川越市長としての川合よしあき」として情報発信をしている以上、このフェイスブックは**公人発言**であることは明白だ。

以前から川合市長は、本紙の川合市政糾弾の姿勢と言論活動に対して異常な敵愾心を隠すこともなく、市長ブログ（こちらはホームページ作成の費用に公費が充てられている可能性もある）において本紙社主である私に対し、松本州弘と名指して呼び捨て表記し公然と非難している。松本は川越市に住民票を置く市民であり、川越市の主権者でもある。市政を糾弾する市民だからというだけで、主権者市民を名指して呼び捨てにし、市長ブログやフェイスブックで悪態を公表する市長が世界のどこにいるのだろうか？

川合市長は、市民に対してのみならず、本紙とも取材協力関係にある国際的なドキュメンタリー映画監督・土屋トカチ氏や全米での映画配給歴もある高橋玄監督らも、同じく市長ブログで呼び捨てにして非難している。およそ自治体行政のトップの言論でないことは誰の目にも明らかだが、川越市議会は総じて川合市長の「公私混同SNS」を注意しようという市議もないようだ。

フェイスブックには翻訳機能があり、日本語の投稿内容も瞬時に多言語に自動翻訳され世界中で閲覧できるので、国際的な観光都市でもある川越市の市長による、ソシオパスも顔負けのSNS発言は、きっかけさえあれば国際的に注目されることもあり得る。そのような危機感を川越市政は、微塵も感じていないようである。

自身の「買春疑惑」を公人SNSで公表する意図はなにか？

さて、フェイスブック「川越市長 川合よしあき」で、川合市長は12月20日付で驚くべき投稿をした。発端は本年11月、市民男性から本紙に寄せられた情報である。この男性は「川越市議会・明ヶ戸亮太市議の知人」とであると名乗ったうえで「川越市長である川合善明氏が川越市議を介して、未成年の女子学生を買春【かいしゅん・男の方が報酬を与え、女性の貞操を買うこと】した」との話を、明ヶ戸市議から直接聞いたというのである。これが事実であれば市政を揺るがすところではない重大な事件である。

本紙は、市民男性から提供された情報について真偽を調査する上申書を川越市議会に送付した。ところが、その書面が市議会に渡った直後、明ヶ戸市議は川合市長のもとに駆け込み「自分はこのようなことを言っていない」と釈明したというのである。つまり明ヶ戸市議は、本紙に情報提供をした市民男性が嘘を吹聴したもので、自分が川合市長の「買春疑惑」などを口にするはずがないと市長に泣きついたことになる。すると真実は2つに1つだ。

市民男性が虚偽情報を本紙に寄せたのか、明ヶ戸市議が市民男性を裏切って川合市長におもねるために「川合市長の買春疑惑」を自分から市民に話したことを隠そうとしたのかのいずれかということになる。

それにしても、常識的に考えて、仮にも行政首長が身に覚えのない「未成年子女の買春疑惑」を噂されていると知れば、まず明ヶ戸市議から当の市民男性に事情を聞くように示唆するだろう。市長が無実であるなら、本紙に情報を寄せた市民男性の誤解か、又は何かの間違いかもかもしれないのだから事実確認もしないうちから、いきなりフェイスブックで、さも本紙・松本が黒幕の事実無根のネガティブ・キャンペーンであるかのような名指しの情報発信などしない。少なくとも「まともな市長」であるなら…。なにしろ、問題のフェイスブック「川越市長 川合よしあき」は次の書き出しで始まっている。

『先ほど、明ヶ戸亮太市議会議員が私の部屋に来られ、写真の文書が川越市議会議員全員に送られてきたようだ、と話して行かれ、文書のコピーを頂きました。』

「先ほど」得たばかりの情報を、なんらの事実確認の裏付けもせずに、また市政への影響も一顧だにすることなく自らの「未成年子女買春」疑惑の噂を自分から公表するなど、正常な政治家が出来ることではない。しかし川合市長は到底、正常な市長ではない。現在も続いている新井喜一元市議のハラスメント疑惑事件にしても、川合市長は第三者委員会の調査結果報告が出る以前から「市長ブログ」で、公然と新井氏を推定有罪のように得意になって断罪していた。

そもそも弁護士資格を持つ川合市長が、事実認定もされていない事件に対して一方的に新井氏を「クロ」だと断定的に公言することが異常である。また不正市道認定での住民訴訟では、原告市民に川合市長自ら電話をして「私を訴えていますね？」と心理的な圧力をかけている（本紙社主・松本の埼玉弁護士会に対する川合氏の懲戒請求事案はこの件である）。住民訴訟では川越市の代理人弁護士がいるにもかかわらず、弁護士でもある川合市長は法曹のマナーさえ無視して自らの代理人を飛び越えて原告住民に直接連絡をすることに、なんらの躊躇も問題も感じないようだ。

そのソシオパスにも似た病的な川合市長の行動律は、本件「買春疑惑」でも全く同じ反応を見せている。あたかも「自分から公言しているのだから事実であるはずがない。事実なら隠べいするはずではないか」という稚拙な詭弁術が有効だと信じているかのようである。あるいは川合市長とその盲目的な支援者（市との利害関係にある…）は「反市長派の情報操作だとすぐにわかるから公表したのだ」と言いたいのだろうが、その主張こ

それが川合市長自身とその支援者に最も欠けている「公人としての川合善明」の倫理観であり行動規範なのである。

繰り返すが問題のフェイスブックは「川越市長 川合よしあき」である。市長ブログも同じく「川越市長」として発信されている。法的かつ社会的に川越市という自治体を代表する川合市長は、ほとんど「個人」としての自我をむき出しのまま、首長として発言することを止めない。本紙が何度も糾弾している通り、このようなことは市長が自分を市民社会の「王」だと錯誤でもしていない限り平然と繰り返せるものではなかろう。

川合市長はソシオパスか？

さて、川合市長と関連がある資料であるかどうかは読者諸氏の評価に委ねるしかないが、ここに興味深い見解を引用しよう。

以下は、ソシオパス（反社会性パーソナリティ障害、社会病質者）研究の権威である心理学者らの分析をまとめたマクリナ・クーパー・ホワイト女史の論稿が指摘する

「ソシオパスであると疑われる人間」の11項目。

1. 過大な自我の持ち主である

ロサンゼルス郡精神衛生局の臨床心理学者セス・マイヤーズ博士も、ソシオパスは極度のナルシストであり、自分は特別だという意識がきわめて強いと発表しており、ソシオパスは自分の失敗を他人のせいにする傾向も強いという。

2. 嘘について、人を操るような行動を示す

3. 共感の欠如

「ソシオパスは、ほとんどの人が持っている有意義な内面世界をあまり持ちあわせていない。それはおそらく、本当の意味で他人の感情世界を想像したり、感じ取ったりすることができないからだろう」。自らソシオパスと診断され『Confessions Of A Sociopath (ソシオパスの告白)』という本を書いた、M.E. トーマス氏はナショナルパブリックラジオ (NPR) にそう語っている。

4. 自責の念や羞恥心の欠如

5. 恐ろしい状況、危険な状況でも、不気味なほど落ち着いている

6. 無責任な行動や、あまりにも衝動的な行動を取る

ソシオパスは目標をころころ変え、その場の衝動で行動する。
金銭面の問題や他者に対する義務に関して無責任だ。

7. 友人がほとんどいない

ソシオパスには友人がいない場合が多い。少なくとも、本当の友人はいない。

「ソシオパスは、自分にとって必要な時以外は、友人を欲しがらない。あるいは、友人がいる場合でも、全員とつながりが希薄で、表面的につきあっているだけだ」と、心理学者のロス・ローゼンバーグ氏は、ザ・ハフポストに語っている。

8. 魅力的である——ただし、表面的に

ソシオパスは、強いカリスマ性を持ち、愛想がいい場合もある。そうすれば、欲しい物が手に入りやすくなることを知っているからだ。「彼らは極めつきのペテン師で、いつも何かを狙っている。人々は、ある人がソシオパスであることに気づくととても驚くが、それはソシオパスが普通の人に混じることに、驚くほど長けているからだ。ソシオパスは変装の名人だ。見つからないようにするための最も有効な手段は、外面を取り繕うことなのだ」と、前出心理学者・ローゼンバーグ氏は言う。

9. 「楽しいかどうか」を人生の行動指針にする

10. 社会規範の無視

ソシオパスはルールや法律を破るが、それは社会のルールが自分には当てはまらなないと考えているからだ。

11. 視線が強い

ソシオパスは、目をそらさずにアイコンタクトを取り続けても平気だ。

ソシオパスは礼儀正しく目をそらしたりしない。

引用：HUFFPOST

【ソシオパスとつきあっているかもしれない11の兆候】マクリナ・クーパー・ホワイト著

冷静な思考力がある市民、市議であれば、異常な対応を繰り返す川合市長がソシオパスである可能性を想定しても、それ自体は不法行為ではない。そもそも専門医にソシオパスという診断を受けた人間でもそれが理由で職場から解雇される事例はまず聞かない。公人であればなおのことだ。

一般庶民の常識からは、自分たちが選んだ市民代表がソシオパスであるなどと想像もしない。しかし、当時ドイツ国民に熱狂的に支持されたヒトラーがそうだった（ヒトラーの場合、サイコパス<精神病質者>に分類されることが多いが）。実権を握らせた後で気がついて遅かったという歴史はどの国にもある。ましてや地方自治体であれば数えきれない。有権者が選んだ市民代表が、有権者が期待し想定していた人格の持ち主であるとは限らないことは、選挙のたびに代わる議員や首長が証明している。バカげた例え話だが、仮に有権者の判断が正しければ、ひとつの自治体や国家は最初に選ばれた首長のその寿命が尽きるまで同じ首長が政権を維持するはずである。

現実社会でそうならないのは、有権者の判断が間違っていたからであり、または有権者を一切無視したまま暴走する首長を主権者である市民が放置するからだ。

明ヶ戸亮太市議は、 「市民男性」を嘘つきだと断言した説明責任を果たせ

大前提の話になるが、本紙に「明ヶ戸市議から聞いた、川合市長の買春疑惑」という情報提供をした市民男性の告白が虚偽であるならば、巻き添えにされた明ヶ戸市議は、市議会会派の代表と共に、まず本紙の文面に対して抗議することが順序であったはずだ。ところが明ヶ戸市議は、本紙の上申書が市議会に送付されたと知るや、なにをさておき市長室に駆け込んで「私ではありません」と必死の陳情をしているのだから不可解である。もとより市議と市長は上下関係でも親分子分の関係でもない。

市議は選良として、常に首長と市政の活動を監視し、問題があればそれを議会にはかって改善させる法的かつ社会的な義務がある。明ヶ戸市議がそうしないで、とにかく川合市長に敵視される前に火種を消そうと媚びへつらう事実は、明ヶ戸市議が単なる川合市長の傀儡（くぐつ=かいらい）であることを自ら露呈したに等しい。

そうでなければ明ヶ戸市議は、本紙はおろか同市議の名を騙って虚偽情報を流布した市民男性を名誉毀損で告発するか、少なくともその市民男性の所在について公式に本紙に質問するか市議会で問題にすべきことである。しかし、現在までに明ヶ戸市議が本紙に対して抗議や事情を尋ねることはない。

その事実からすれば、明ヶ戸市議が市民男性に「川合市長の買春疑惑」を漏らしたことは嘘ではないと想像されても無理はない。明ヶ戸市議は、市民男性が義憤の告発をする前に、自ら説明責任を果たすべきではないのか？

「買春疑惑」公表までの1か月のタイムラグ（時差）の謎

本件では、さらに不可解な点がある。フェイスブック「川越市長 川合よしあき」の問題の投稿には次のように書かれている。

『ひと月ほど前に、「川合善明川越市長の女子学生買春疑惑があります 斡旋したのが市議会議員 この情報元は〇〇！ 徹底追及して下さい！」と記載したハガキが某所に来たとの情報を貰っています。誰がどの様な目的でこの時期に誹謗中傷をしているのか、おおよその推測は出来ています。』

この記述が事実であれば、川合市長は自分に対する「買春疑惑」があることを1ヵ月前に把握していたことになる。しかし、この噂の情報を市長として公表したのは、本紙が市議会に文書送付した後のことであり、市長はおよそ1ヵ月の間、政権を揺るがしかねない本件疑惑を放置していたことになる。このことは非常に重要である。

なぜなら、川合市長が1ヵ月前の「ハガキ」を怪文書情報のごとく歯牙にもかけない意味で放置していたというならば、本紙の市議会に対する告発行動に限って俊敏に反応することが矛盾する。逆にいえば、川合市長は、本来「放置しておいて、なんら支障がない噂」だったはずの「買春疑惑」を本紙の情報操作であるかに匂わせるように公言したことになる。

仮に「明ヶ戸市議から市長の買春疑惑を聞いた市民男性」の情報が真実であったならば、川合市長が「先ほど」持ち込まれたばかりの情報を早々に「反川合の行政調査新聞の情報操作である」かのようにSNSで公言したことも整合性がある。一方、市民男性による本件「川合市長の買春疑惑」については、本紙こそが驚いたのである。いかに川合市長が女性に対し強い執着心を抱くという複数の情報提供を得ようとも、未成年の子女を買春するなどの不遜な行為を実行する程、愚劣な男だとは想像もしていなかったからである。

本紙は川合市長の敷く政治に対して苦言を呈し糾弾する立場での対決であって、同氏が買春に精神を傾注させる最低な畜生共であるならば、もはや言論活動上の敵という以前の問題であり、そこまで腐敗した首長であるとは思っていなかったというのが本紙の本音である。腐り果てた相手を敵にしたところで、こちらが虚しいだけのことである。しかし、川合市長は自らのフェイスブックに本件「買春疑惑」を、こともあろうか本紙批判の材料として、マスコミの特ダネであるかのように喜々として取り上げている。

川合氏は市長として、この振る舞いがどれほど異常なことか全く理解できていないのである。

戦略的に考えれば、仮に本紙が川合市長を貶める目的でこのような虚偽情報を流布したならば、なぜ市議会に調査を求める文書を頒布することは、まるきりの逆効果である。なぜなら、それを受けて市議会が真に調査を開始すれば、議事録その他の公文書には「行政調査新聞社からの告発を受けて」という原因が記録されることになるからで、本紙が市議会に対して虚偽情報を流布することは言論家としての自殺行為でしかない。

実際には、川合市長は「明ヶ戸市議がこれは全くの嘘です」と泣きついてきたことを奇貨として「市長を糾弾する事実認定が曖昧な情報を流布するものは行政調査新聞が発信源である」という心象を担保したかったのではないだろうか？

そうすることによって、住民訴訟によって追及されている不正市道認定も、懲戒請求にさらされている問題も、すべて虚偽であるという主張に援用出来ると考えたとしても不思議ではない。なにしろ異常な市長なのだから。

仲介した市議は誰なのか？

川越市議会が、このスキャンダルを自浄できなければ、
東京2020オリンピックにも影を落としかねない緊急事態である！

言うまでもなく、本件「川合市長の買春疑惑」のもう一方の問題点は、「市議会議員の斡旋」であったという情報である。明ヶ戸市議が市長に弁明した「すべてが市民男性の嘘」であるなら、市議会は名誉のためにも明ヶ戸市議にその市民を特定させ、法的措置も視野に入れた然るべき対応をすることが市議としての義務だ。逆に、実は明ヶ戸市議の告白が真実で、市議会のなかに川合市長へ「未成年子女の買春」を斡旋した市議が存在したとすれば、メディアを巻き込むスキャンダルとなる。

折しも開催までの秒読みに入った「東京 2020 オリンピック」でゴルフ競技会場となる川越市の首長に、この問題が勃発したと政府や日本オリンピック委員会が知ればどうなるのだ。なまじ国際的観光地としての評価が定着している川越市は、一夜にして世界中からバッシングされることになる。

そのような危機的状況を救う使命は川越市議会に託されているのだ。また市議会の他に、誰がこの危機を救えるというのだろうか。

市議会諸氏には、本件の重大性と緊急性をわが身の進退にも重ねて有効な対策を講じることが急務であると申し上げて、本紙からの提言を結ぶ。